様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　５月２５日現在

機関番号：14501
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2010
課題番号：19720184
研究課題名（和文）
南アジア社会のイスラーム化に関する歴史文献学的研究
研究課題名（英文）
A historiographical study of the Islamization of the South Asian societies
研究代表者
真下裕之　（MASHITA HIROYUKI）
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：70303899

研究成果の概要（和文）：パキスタンや英国・フランス等の研究機関に所蔵されている未公刊の手写本資料の複写を多数収集した。これらによって得られた歴史文献資料を参考にして、南アジアとインド洋海域におけるメッカ巡礼、南アジアにおけるペルシア語文語文化の展開、南アジアのイスラーム社会における歴史認識の形成と展開、南アジア史におけるイスラーム改宗など、南アジア社会のイスラーム化に関する諸問題について、新たな知見を得、これを公表した。

研究成果の概要（英文）：I, the project leader, have procured a number of reproductions of historiographical materials which are yet to be published and preserved in the libraries in Pakistan, the United Kingdom, France and so on. Focusing on the Islamic network over the Indian Ocean as reflected in the Meccan pilgrimage of the Indian Muslims, the development of the Persian literary culture in the South Asia, the formation and development of the concept of Indian history in the Indo-Islamicate society, and the Islamic conversion in the South Asian history, the project leader published new findings about the aspects of the Islamization of the South Asian societies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	700,000	0	700,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	600,000	180,000	780,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総　計	2,500,000	540,000	3,040,000

研究分野：南アジア史
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：イスラーム　南アジア 改宗　イスラーム化　ペルシア語　神秘主義　歴史書

１．研究開始当初の背景

中央アジアに発する人材移動の波は、北インドの歴史を動かす大きな要因でありつづけた。十二世紀後半以降、この波動はふたたび活発な様相を呈するが、これを担った人々は従来なかった以下の如き三つの特徴を備えていた。すなわちその大多数がテュルク系の人々であったこと（少数のタジク系、モンゴル系、アフガン系の人々がこれに随伴することもあった）、宗教的にはおおむねイスラームを奉じていたこと、そして文化的にはペルシア文語文化を獲得していたことである。

イスラームを信奉し、ペルシア文語文化を備えたテュルク系の人々は、中央アジアにおけるテュルク化、イスラーム化、ペルシア語化というプロセスの所産である。この三つのプロセスは中央アジアにおいては別個に漸次展開したが、南アジアではその所産がいわ

ば移植されることによって、そのプロセスが見かけ上同時かつ急激に進行することになった。

このため、南アジア社会においてテュルク人やペルシア語は容易に他者としてのイスラームの表象になりえた。すなわち①テュルク人の政治的覇権も、②ペルシア文語文化の進展も、しばしばムスリムの活動と同一視され、下手をすると③社会のイスラーム化そのものと混同されてしまう。しかしながら、これら三つのプロセスは、たがいに密接な関係をたもちながらも、本質的には別個の文化要素を南アジア社会に加えていったものと見なさるべきである。

たとえば十五世紀以降には在来のインド出身者（非ムスリム）がペルシア語文語を獲得して詩作を行い行政官として活躍する事例がしばしば見られるが、この現象は上記②のプロセスを主に反映し、①のプロセスと微妙に関係するものの、③のプロセスとは無関係である。また政治的・地理的には東の辺境に位置するベンガル地方にきわめて稠密なムスリム社会が成立した事実は、①のプロセスの強度が③のプロセスの深度を必ずしも左右しないことの証である。実際、ムスリム政権の領域的な広がりが十七世紀までに南アジアの大半をカヴァーしたにもかかわらず、南アジア社会のイスラーム化は西アジアや中央アジアのそれに比べてかなり不完全な結果に終わっているのであって、今日南アジア地域のムスリム人口の比率は全体の三割程度を占めるに過ぎない。

南アジアにおけるイスラーム社会の歴史を専門とする申請者は以上のごとき認識にもとづき、前近代における南アジア社会の動態を上記三つのプロセスに分解して、個別的に研究する必要があると考え、それぞれについてこれまで研究を進めてきた。すなわち上記①の政治的プロセスについては、科学研究費補助金・特定領域研究 (A)(2)「チャガタイ・トルコ語、ペルシア語文献の諸写本研究」（課題番号 11164232)、科学研究費補助金（基盤研究 C「前近代インドにおけるイスラーム諸国家制度の動態的研究」（課題番号 15520427)）を得て南アジアにおけるイスラーム諸国家の国家制度史に関する研究を進め、現在その成果を整理しているところである。また上記②のペルシア語文語文化の進展に関しては、研究業績【2】によって研究状況と問題点の整理を行った上で、北海道大学スラブ研究センターにおける COE プログラム「スラブ･ユーラシア学の構築」の研究プロジェクトに参加し、その成果をまとめた。そして上記③に当たる南アジア社会のイスラーム化というプロセスに関しては以下に述べるごとく明瞭な構想を計画していたものの、実際に着手するには至っていなかった。以上が本研究の背景である。

２．研究の目的

13 世紀から 17 世紀における南アジア社会のイスラーム化の諸相を歴史文献学にもとづいて明らかにすることが本研究の目的である。本研究では社会のイスラーム化を一定地域におけるイスラーム教徒人口が増加するプロセスと見なし、その変化の現象を以下の三つのテーマ、すなわち A. イスラーム教徒の来住、B. 在来宗教の信徒のイスラーム改宗、そして C. 在来宗教の信徒のイスラーム教徒による物理的排除、に分解して、それぞれ研究を進める。これにより、テュルク化、ペルシア語化そしてイスラーム化という三つのプロセスが並行的に進行したこの時代の諸相の一端を明らかにし、この時代の南アジア社会の動態を総合的に理解する一助とすることを本研究は目指している。

なお応募者の研究計画全体における本研究の意義は次の通りである。応募者の研究計画においては、上記三つに分解して考察されたプロセスは将来、あらためて総合的に考察され、例えば比較社会史的なアプローチなどによって、より広い視野のなかに位置づけられるべく構想されている。たとえば、南アジアに比べてより速やかかつ徹底的なイスラーム化を経験した西アジアや中央アジアなどの事例とのすりあわせは、広い意味でのイスラーム世界の歴史研究に新たな視角を提供できるであろう。またマイノリティでありながらも当該社会に大きな存在感を示し続けた南アジアのイスラーム社会の動態は、社会学や地域研究という異なるディシプリンの分野に対しても建設的な事実関係を提供できるはずである。かくの如き総合的な学術展開をはかり、研究者として次のステージに進むためには、今なお着手できていない上記③イスラーム化という個別課題の研究を進展させておくことが不可欠である。本種目（若手研究）に応募した所以もまさにこの点にある。

３．研究の方法

本研究は４年の研究期間を設定し、イスラーム化という巨大なテーマを以下のごとく分解して研究を進める予定である。ある社会のイスラーム化とは、第一義的には一定地域におけるイスラーム教徒人口が増加するプロセスである。そしてその変化の現象は、A. イスラーム教徒の来住、B. 在来宗教の信徒のイスラーム改宗、そして C. 在来宗教の信徒のイスラーム教徒による物理的排除、に大別できよう。本研究は対象とする時期を 13 世紀から 17 世紀の期間に設定したうえで(その理由は、参照しうる歴史文献がこの時期に、もっともバランスよくかつ稠密に分布して

いることである)、上記 A, B, C それぞれのテーマについて、以下のごとく研究を進める。

テーマ A. は軍事的征服や商人の居留地形成によって史実に現れるが、それとは別に詩人、宗教者といった文人の来住もまたこの A. の現象を構成する。本研究の特色のひとつはこの現象に焦点を当てて、社会のイスラーム化を記述する点にある。文人の来住の史実じたいを、個別的に取り上げた研究はこれまでにも存在するが、それらを総合的に取り上げた研究は乏しい。まして、かかる人材移動と在来社会のイスラーム化との関係を問うた国内外の研究は管見の限り見あたらない。同時代の名士録、聖人伝、詩人伝等の歴史文献を活用して、史実を積み上げ、それを総合的に分析することによって、このテーマに対する解答案を示す。

またテーマ B. に関して、改宗者の増加を数量的に検証することは、史料の性質上ほとんど不可能であるため、個別の事例を積み上げて、大まかな全体像を再構成する作業が何よりも必要である。本研究では、歴史書などの叙述史料の他、改宗の増加に大きく寄与したとされているイスラーム神秘主義者たちの列伝や語録などの歴史文献を大量に分析することによって、この作業を進める。さらにこのテーマ B. は、改宗の史実ばかりでなく改宗を伝える言説という問題にも通じているので、テクストを批判的・歴史的に解体する文献学の方法によっても分析される必要がある。この作業は史実の確定という効果ばかりでなく、改宗に関わる社会の心性にも迫りうる可能性をはらんでいる。実は南アジア各国（主にインド、パキスタン）において行われてきた、イスラーム神秘主義に関する研究には史実と言説との乖離に対する認識が乏しいものが多い。この研究状況に照らすと、本研究の立場は独創的かつ建設的なものであると考えられる。

またテーマ C. に対する本研究のアプローチの特色は、C. の史実それ自体ではなく、C. を伝える歴史文献の言説そのものを問題にする点である。このアプローチによって「イスラーム教徒の寛容・不寛容」などといった非歴史学的な判断を留保せしめたい。分析の対象となる歴史文献は、歴史書のごとき叙述史料のほか、人名録、詩人伝、イスラーム神秘主義者たちの列伝などであり、言説を分析の焦点とする点で、この作業は B. に対する作業とも重なる部分がある。以上の作業を進めることにより、イスラーム化という現象を史実と言説の両面から記述する手がかりが得られるであろう。以上、文献学の方法に従う三つのテーマによって、本研究は南アジア社会のイスラーム化という現象の歴史的意義を明らかにするために、独自の建設的な貢献を国内外の学界においてなしうるものと考えられる。

以上の、本研究の基礎的な素材となる歴史文献はその多くがいまだ公刊されておらず、手写本の状態で世界各地に所蔵されている。そのため各国の研究機関に実地調査に赴いたり、マイクロフィルム等の複写を取り寄せたりする作業が、資料収集の主要な内容となる。

４．研究成果

当初、パキスタンの複数の都市に実地調査に赴く計画であった。しかし現地の政情が安定しなかったため、渡航を幾度か見送った結果、最終的には同国のカラチに赴き、パキスタン国立博物館に所蔵される関係資料を調査した。調査の結果、重要性が判明した複数の資料については、同博物館の許可を得て写真撮影することができた。またイギリス、フランスの研究機関に所蔵される手写本史料のマイクロフィルム複写を収集することに注力した（その他)。

実地調査に生じた欠を補うため、英国およびフランスの研究機関に所蔵されている手写本資料（ムスリム聖人伝資料、イスラーム神秘主義関係文献、ムガル帝国時代のペルシア語古文書資料、ベンガル地方のペルシア語地方史資料、ムガル帝国のペルシア語王朝年代記など）について、当初計画以上の量を収集すべく、マイクロフィルムあるいはデジタルファイルのかたちで複写を入手した。

これらの資料と既存の資料を、補助者の支援も得ることによって、電子的な画像データとして整理し、そのテキストデータの一部を電算機に入力して、調査・分析に供した。

インド、パキスタンで出版されている、南アジアのイスラーム史関係、とくにイスラーム神秘主義やイスラーム社会の聖人に関係する公刊資料を探索、入手して所属機関に備えた。とくに現地図書館の手写本資料の目録については、日本の公的機関に所蔵されていないものも手に入っているので、今後に現地で行う資料調査をより綿密かつ効率的に実施できることになったものと考えられる。さらに、本研究で得られた知見を研究史の中に定位させるため、南アジア史、イスラーム史関係の研究文献を多数収集し、所属機関に備えた。

以上によって得られたデータや知見を参考にしつつ、南アジアの海港都市スーラトに、メッカ巡礼船の発着地としての意義を見いだし、インド洋海域におけるイスラーム・ネットワークの広がりの一端を明らかにした。この知見は、南アジア社会のイスラーム化とイスラーム世界他地域との交流との関係を考える上で、少なからぬ意味を持つものと思われる。また南アジア社会のイスラーム化における推進力の一つであったイスラーム神

秘主義の聖人たちの働きばかりでなく、彼らを取り巻く政治権力者たちの動向についても、いくつかの貴重な情報を得つつあるところである。また本研究が取り扱う歴史文献のほとんどがペルシア語で書かれたことに鑑み、南アジアにおけるペルシア語文化の展開についても本研究で得られた知見を参照しつつ調査し、その成果を論文として公表した。さらに、本研究のテーマと密接に関連する、南アジアの歴史意識の形成と展開について、本研究において収集した資料等を調査し、その知見を学会で報告し、論文として公表した。また本研究のテーマと密接に関連する改宗の問題については、南アジア史におけるイスラーム改宗の諸問題に関する研究報告を行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）
①真下裕之「インド・イスラーム社会の歴史書における「インド史」について」『紀要』38, 2011, pp. 51-107.（査読無）
② Rudi Matthee and Hiroyuki Mashita, `Kandahar iv. From the Mongol invasion through the Safavid era', *Encyclopaedia Iranica*, Online Edition, 10 November 2010, available at http://www.iranica.com/articles/kandahar-from-the-mongol-invasion-through-the-safavid-era.（査読有）
③真下裕之「南アジア史におけるペルシア語文化の諸相」森本一夫編『ペルシア語が結んだ世界：もうひとつのユーラシア史』北海道大学出版会 2009, pp. 205-231.（査読有）
④真下裕之「インド洋海域史における 17 世紀前半インド西海岸の港市Suratの一側面」『海港都市文化研究』 創刊号, 2009, pp. 43-74.（査読無）
⑤真下裕之「ムガル帝国」小杉泰・林佳世子・東長靖編『イスラーム世界研究マニュアル』2008, pp. 183-189.（査読無）
⑥真下裕之「イスラーム化の史実と伝説：南アジア史におけるイスラーム信仰戦士」共生倫理研究会編『共生の人文学：グローバル化時代と多様な文化』 2008, pp. 190-214.（査読無）

〔学会発表〕（計３件）
①真下裕之「南アジア史におけるイスラーム化と改宗」千葉大学COEスタートアッププログラム「邂逅と共生の歴史学：新しい世界史像の構築」研究会「近世世界における「改宗」問題」2011 年 1 月 8 日、千葉大学文学部
②真下裕之「インド・イスラーム社会の歴史書における「インド史」について」史学研究会例会、2010 年 4 月 17 日、京都大学大学院文学研究科
③真下裕之「インド洋海域史における海港都市:17 世紀前半におけるインド西海岸の海港都市スーラトの一側面」国際学術シンポジウム「東アジア海港都市の共生論理と文化交流」2008 年 11 月 27 日、韓国海洋大学校(釜山)

〔図書〕（計１件）
Hiroyuki Mashita (ed.), *Royal Asiatic Society Classics of Islam II. The Muslim World 1100-1700: Early sources on Middle East History, Geography and Travel*, 8 vols., RoudledgeCurzon (London and New York), 2007.

６．研究組織
(1)研究代表者
真下　裕之（MASHITA HROYUKI）
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：70303899

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし